# 資料渉猟余話

その102

## 八幡郊處『天龍峡十勝印譜』の発見

不濁

尾林焼・天龍峡焼などの篆刻陶器の歴史を辿るうちに、明治30年代に五世濱邨蔵六と交流のあった岡谷の篆刻家・八幡郊處がその草創期に関与していることを知り、さらに村澤武夫が『信濃人物誌』で郊處の作品（印譜集）として紹介している『鵞湖十二勝印譜』『郊處壬子印譜』を探索しているうち、たまたま郊處末裔の蔵からその二書とともに『天龍峡十勝印譜』が発見された。三書とも国会図書館及び中村不折の書道博物館や地元の図書館には未所蔵である。

このうち『鵞湖十二勝印譜』は正確には『諏訪十二勝印譜』といい、明治34年頃の刊行。また『郊處壬子印譜』には明治43年の序があり、大正元年10月に刊行されている。なかでも『郊處壬子印譜』には福島安正、小坂芝田、菊池契月、松林桂月、中村不折、渡辺千秋（宮内大臣）、渡邉國武（大蔵大臣）、徳富蘇峰（猪一郎）、小川平吉ら著名人の印譜に混じって、千代の大平小洲のためにつくられた印譜も紹介されている。郊處の腕前を推し量ることができよう。

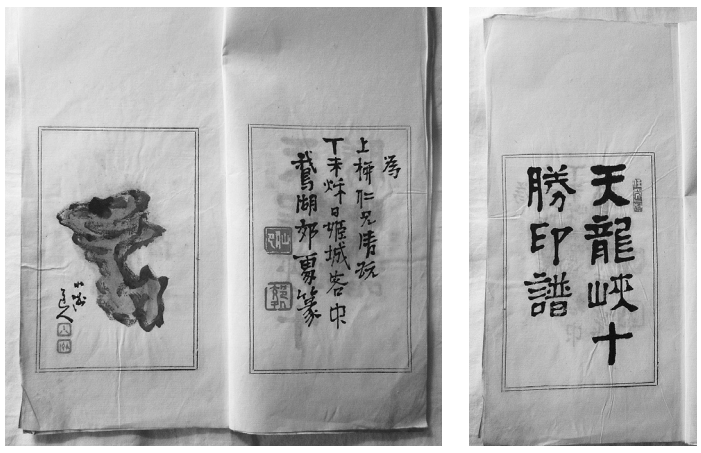
また『天龍峡十勝印譜』は表紙と奥付がないが、巻頭に、「丁未秋姫城客中」（＝明治40年秋、飯田に滞在中）及び「上柳仁兄」の書きつけがあり、また大平小洲の口絵が載せられているので、この頃の製作と類推できる。天龍峡十勝の印譜集である。

阪谷朗廬『天龍峡の記』（明治13年）で全国の詩人・書人に紹介された天龍峡は、その後、明治15年松泉関島良致に迎えられた日下部鳴鶴（東作）が、岩峰十勝を選び、揮毫。岩面に自筆の文字即ち「垂竿磯、烏帽石、歸鷹崖、姑射橋、烱潭、浴鶴厳、仙牀磐、樵麻洞、龍角峯、芙蓉峒」を刻み、翌16年初冬には岩彫りも完成「天龍峡十勝」が創出された。

それらが呼び水となって、巌谷一六・平野草雪・尾崎行雄・富岡鉄斎・萩野音松（登山家）ら、画家や文人墨客が相次いで来峡した他、明治36年には痴山北原阿智之助（芋作）が『伊那名勝志』を出版、天龍峡保勝会が結成され、全国的に知られるようになっていた。明治41年7月には「日本」新聞の「日本避暑地投票」で3位に選ばれ、明治42年8月11―14日には河竹繁俊（当時は市村姓）が「避暑地天龍峡」を「南信」新聞に連載するなど、飯田線の天竜峡開通を前に、明治末期から大正期にかけては天龍峡の隆盛期を迎えていた。

一方で、龍江尾林には明治30年頃、水野儀三郎を頼って瀬戸からやってきた加藤熊之丞（俊二）が薄手の花瓶や菓子器、茶器、酒器等に山水画や菊花を色絵で描くなどの尾林焼に新機軸を打ち出した。さらに中村蘭台（初世）の来峡（明治36―37）に刺激され、その門下になる萩元甸斎（派＝林朴斎・木下卓斎・小斎・甸畝、等）、篠田潟斎などが活躍し、全国特産物博覧会や「一府十二県連合共進会」で入賞、乞われて朝鮮総督府の商品陳列館などにも出品している。

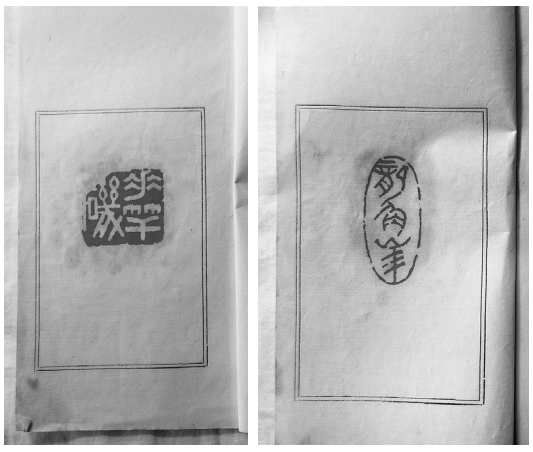
同じ頃、諏訪から八幡郊處や、東京から大橋浩堂といった篆書家も明治末相次いで飯田を訪れ、専照寺や大和館、蕉梧堂などに半年から1年近く滞在し、篆刻や楽焼の技を同好の士に伝え、地元の名士と交流している。八幡郊處は大平小洲と親しく数年間に何度も南信に足を運び、大橋浩堂はそのまま尾林に居住、大正4年9月47歳で亡くなるまで当地で活躍した。



発見された『天龍峡十勝印譜』

このほど発見された八幡郊處の『天龍峡十勝印譜』の印章はまさに郊處が再来していた明治40年2月から翌41年5月頃の製作され、明治45年発光堂から刊行された上柳緑編『天龍峡』に収載されている印章そのものだ。

『天龍峡』は、酒造家上柳緑（喜茂・不尽庵、平洲、外川）編となっており、「例言」によれば高松陸舟・千野鳩林・小林天龍の三人が主に編集にあたったとある。永坂石埭（漢詩界の泰斗、森春濤門四天王の一人）の題字、野村素介（素軒）・久我通久（梅庵）・東久世通嬉（竹亭）などの記号、朗廬阪谷素・潭處丸山仲粛・松泉関島良致・鳴鶴日下部東作を筆頭に、痴山（芋作）・収蔵（奥村）・盈重（有賀）茂穂（今村）・重興（原九右衛門）など内外の和漢の詩人たちの天龍峡を詠った作品、その他、大橋浩堂の篆書「雲煙供養」と、十勝の挿絵とそれぞれの篆刻、「跋」は小漣山人こと薄井龍之という贅沢な顔ぶれである。



十勝の印章「垂竿磯」「龍角峯」

しかし、その主題の一つでもある十勝の挿絵は落款があるが不詳、篆刻印章についても記述がないので小生は篆書を載せた大橋浩堂のものと思い込んでいた。

郊處は昭和7年12月25日に急逝したが、大正12年の平民宰相・原敬の盛岡にある菩提寺への奉納額（原敬書・郊處刻）や、昭和5年の諏訪大社下社に「日本第一大将軍神」「克忠己孝」（東郷平八郎書・郊處刻）の篆刻額奉納として全国的にも著名だった。郊處未亡人の残したスクラップにも新聞の訃報に「明治卅年下伊那郡飯田町に滞在中天龍峡の尾林焼の篆刻を創始元祖として今日の名勢を博した雅味津々たるものも今は翁の面影をしのぶ遺物となった」という記述（訃報「篆刻の巨匠　八幡郊處翁」）を確認していたが、スクラップには「東京」という書き込みがあるだけで紙名も掲載年月日も不詳であった。先に発見した尾林・二木家に残されていた郊處刻の徳利などと併せて、今回発見された『天龍峡十勝印譜』の10個の印章はまさに八幡郊處が天龍峡に深く関与していたことを示す一証左に他ならない。

明治末から大正期、戦前と天龍峡の隆盛と軌を一にして盛んになった篆刻陶器は、その高い芸術性ゆえに時代から取り残され、技術的にも今まさに消えなんとしている。古き良き時代、時代の好みといえばそれきりだが、底流に、この地域の高い教養と審美眼が生み出した歴史が流れていたことは記録しておかねばならない。